
カフェ・ツインナナ

なおこ Naoko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カフェ・ツインナナ

【Nコード】

N8193P

【作者名】

なおこ Naoko

【あらすじ】

カフェの女主人の奈々が、そこで会うお客、そして彼女の過去を交えた話です。奈々は日本人で、アメリカでカフェをオープンしました。このカフェは、実際に存在していたことがあり、実話系です。人はなぜ魅了されるのか、そしてその結末は・・・ちょっと切なくて、怖くて、素敵な話だったので、小説にしてみました。

1話 アレックス

「アレックス、人を殺したことがあるの？」

アレックスは奈々を見た。

そして奈々は、「こんな質問をしてしまうなんて」と、すぐに後悔する。

アレックスは、聞き返す。

「な、なぜそんなことを聞くの？」

「それは・・・」

奈々はそう言いながら、どのように答えようかと模索する。

とは言え、自分に、相手を納得させる理由なんてあるはずはない。率直に答えることにする。

「あなたが、ミリタリーのスナイパーだったって言ったから・・・」

奈々は、「御免なさい」という目をしながらアレックスを見て言った。

奈々は、今まで、スナイパーに会ったことはなかった。

もちろん、そんな人があちこちにいるはずもない。

それは、「そんな人が実際にいるなんて」という驚きから、思わず出てしまった質問だった。

奈々は、カフェ・ツインナナのオーナーだ。

そのカフェは、アメリカ北西海岸の小さな大学街にある。

日本からの留学生だった彼女は、アメリカ人と結婚し、4年後に離婚し、この小さなカフェをオープンした。

そして、彼らがこの会話をしている時、カフェには二人だけだった。

アレックスは奈々の質問に、イエスともノーとも答えない。

アレックスにとって、こんなに率直に質問されたのは初めてだった。

それに、答えられるような質問でもない。

もちろん、自分が先に言ってしまったことだ。

アレックスは、自分の過去をこんなに簡単に話してしまうなんて、と後悔していた。

スナイパーだったなんて言っても仕方のないことなのに、つい話してしまっていた。

とは言え、こんな質問が帰ってくるなんて予想だにしていなかった。普通なら、例えば自分が悪くても、「無神経な女だ」と思うだろう。

それなのに、奈々が言うのと、当たり前前の質問のように聞こえてくる。奈々には、そんな不思議な魅力があった。

こんな質問が出来て、そのことさえ魅力的に思えてしまう女性なんて、彼女だけなのかもしれない。

アレックスは、30歳過ぎの離婚したばかりの男性で、背が高く、ちょっとかっこいい。

改造したかっこいい大型バイクにも乗っている。

さて、奈々とアレックスの出会いはどうだった。

ある朝、奈々はカフェを開け、朝のピークを過ぎた後で、足りない食材を近くの業者用の店に仕入れに出かけた。

その店で声をかけてきたのがアレックスだった。

初め、奈々は、それに気付かないで、コーヒーのシロップをカートに入れていた。

そして奈々は、横で誰かが何かを言っている、くらいにしか思わなかったのだけれど、やっとそれが自分に向かってなのだと気付く。

”Are you talking to me?”（あなたは、私に話してるの？）

”Yes, I am!”（そうだよ、話かけてるんだよ！）

”What do you want to know?”（何を知りたいの？）

アレックスは、もう一度、質問を繰り返す。

ところが、早くカフェに戻りたい奈々は、彼の聞いている意味が分からない。

奈々は、英語が堪能な方だ。

日本語より英語の方が話しやすいと思っているようなところもある。それなのに、この時、アレックスの言っている意味を理解するのに、少し時間がかかった。

離婚したばかりの彼女は、カフェ・ツインナナを始めたばかりで、恋人を持つつもりはない。

むしろ、結婚から開放された喜びがいつぱいで、独身を謳歌し、誰にも邪魔されない自由を満喫していた。

だから、ちよつとかつこいい男がナンパ目的で話しかけても、その気がないので集中できないのだ。

奈々は、様々な場所で声をかけられる。

話しやすい雰囲気、男女を問わず、話好きのアメリカ人に好まれるらしい。

アメリカ人の友達も結構いる。

だから寂しくはない。

むしろ、面倒見の良い彼女は忙しいくらいだ。

ところで、その店を早く出たい奈々は、何とかアレックスの質問に答えようと、英語に集中する。

彼の身なりは良く、高そうなバイクスーツを着ている。

そして、貧しい子たちの世話をするボランティアをされていて、この日は、週末のピクニックのための買い物をしていると言う。

奈々はアレックスの質問に簡潔に答えると、さっさとレジの方へ向かった。

彼女にとって心配なのは、この男性ではなく、留守のカフェの方なのだ。

ところが、アレックスは話を止めようとしなない。

しかも付いて来る。

奈々はカフェ・ナナのビジネスカードを渡して言った。

「このカフェにいるから、ここに来てね」

「明日、必ず行く」

アレックスは答えた。

後でアレックスが言うには、初めて奈々を見た時「彼女に話しかける」と心の声が聞こえたのだそうだ。

さて、アレックスがカフェ・ツインナナにやって来たのは二日後だった。

「昨日、来ようと思ってたんだ。」

「ただバイクで事故に遭って・・・」

と、アレックスは、ジーンズの片足を捲って包帯をした脛を見せる。彼は、約束を守れなかった言い訳を一生懸命にしているらしい。

奈々は、ちよつと笑ってしまった。

もちろん、事故に遭ったのは気の毒だったけれど、30歳を過ぎた、大の大人がすることとも思えない。

それに奈々にとって、アレックスが一日遅れて来たことは、そんなに大変なことでもなかった。

「明日来る」と言った人が、明日であろうが、明後日であろうが、それはお客様の事情なのだ。

その日に来なくても、別に悪いとは思わないし、自分に言い訳することでもないと思っている。

ところがアレックスにとって、それは一大事だった。

奈々に、約束を破る男と思われたくはない。

その時、カフェには他の客はいなかった。

まだ始めたばかりのカフェは、さほど忙しいと言う風ではない。

それでも、常連客は少しずつ増えつつあった。

カフェ・ツインナナは小さなお店だ。

アンティークのもので飾られている。

カフェに入ると、急に、小さな別世界へ紛れ込んだような気がする。飾られているアンティークは、以前、奈々がアンティークのネット・オークションをやっていたころから徐々に集めていたものだ。少し女性寄りではあるけれど、奈々の雰囲気そのものだった。

それに、お客は、女性ばかりでもない。

結構、男性も来る。

カフェには、もう一人、手伝ってくれる友人がいた。

とは言うものの、その友人は少し手伝いをする程度のもので、カフェが起動に乗れば人を雇わなければならない。

それは奈々にとって、少し頭の痛いところだった。

彼女は、この小さなカフェで、誰にも邪魔されず、一人でゆっくりと、お客に接する時間を気に入っていた。

もちろん、それは贅沢だと思う。

これから、これで生活していかなければならないのだ。

とは言うものの、このカフェは、そんな現実を忘れさせる不思議の世界のようでもある。

カフェ・ツインナナは、レンガ作りの大学の校舎が並ぶ通り沿いにあった。

私立大学で、学生も品の良い子が多い。

だから、お客の質も良い。

カフェの前には、かえでの並木道が続いている。

夏は、かえでの大きな緑色の葉が生い茂り、太陽の光を受けて力強く青い空に伸びていく。

秋には、美しく紅葉する。

それはまるで美しい絵画のようで、カフェの大きな窓はそのキャンバスとなる。

冬は、葉を落としたかえでの枝の間から、大学の広い駐車場と、その向こうのレンガ作りの大学校舎が見える。

春になると、再び芽吹いた、柔らかい若草色の葉がそれを覆い隠していく。

その四季折々の光景を、このカフェで楽しめるのだ。

こうしてカフェの常連となったアレックスは、ビジネスマンで、元はミリタリーのスナイパーだったと言う。

明るく、羽振りのよさそうなこの男性の過去は、奈々には、到底、理解できるはずもない世界だった。

その過去が、彼を、貧しい子供たちを助けたいという気持ちにさせるのかもしれない。

奈々は、彼がスナイパーだったと知ったからこそ、その心の奥底にある何かを感じれたような気がする。

ニキは、アレックスが人を殺したのかどうか興味があったのではない。

その答えを求めている訳でもない。

そして、アレックスは、それに答えなかった。

この、まるで時が止まったかのようなカフェからすると、アレックスがいた世界は、まるで別のものだったのだ。

それは、ある日の昼下がり、この二人の他には、誰もいない小さなカフェでの、ちょっとした会話だった。

2話 ラリー

「彼女は、時々、僕をアフタヌーンティーに誘ってくれたんです」
ラリーは、優しく、その思い出を話し始めた。

ラリーは、カフェ・ツインナナのお客の一人だ。

英国紳士の雰囲気がある落ち着いた中年男性で、背がスラツとして
いる。

ラリーは、都市から少し離れた、交通の便の良い場所にある高級紳
士服店のマネージャーだ。

着ている服のセンスもいい。

この日も、ダーク色のカシミヤのセーターからエンジ色のスカーフ
を覗かせ、生地の良いズボンに、品のある靴を履いていた。

仕事中は、自分のズボンの膝を真っ直ぐに保つため、座ることは
ないそうだ。

その仕事の徹底振りから、店のオーナーの信用度は高かった。

むしろ、この店はラリーのおかげで成り立っていると云っても過言
ではない。

店の縫製職人も、腕の立つ中年男性で、ラリーが他の有名店から引
き抜いてきたと言う。

日差しの暖かい昼前、カフェのお客はラリーだけだった。

ラリーは、窓際近くのテーブルに奈々と向かい合って座っている。

ラリーが話していたのは、彼が15歳の時、近所の素敵な家に住ん
でいた24歳の元モデル嬢のことだった。

その、時がゆつくりと過ぎていくようなカフェで、ラリーはこの女
性のことを思い出したのかもしれない。

当時、この美女は、アメリカ全土でも知られているファッション老舗店の若社長の恋人だった。

そして彼女は、時々ラリーを招待して、お気に入りの紅茶とお菓子をご馳走する。

もしかしたら、この少年には、すでに、元モデル嬢を魅了する、英国紳士のような雰囲気があったのかもしれない。

その素敵な家のテラスで飲む紅茶は、きっと美味しかったことだろう。

ラリーがカフェ・ツインナナで注文するのも紅茶だ。

とはいえ、ここで奈々が自慢できるのは、ジャスミンティーと南米のマテ茶だけだ。

ジャスミンティーは、選りすぐりのものを特別注文をしている。

もちろん、他の紅茶もあるけれど、ティーバッグではない。

アメリカ人にとって、紅茶は、ティーバッグの方が親しみがあるらしい。

それにこの店はカフェだから、コーヒーが売り物だ。

コーヒー豆には、かなりのこだわりを持って仕入れ業者を選んでいる。

さらに、産地の自然環境を考慮に入れたもので、その上にオルガニクスの念の入れようだ。

オルガニクにするかどうかは、かなり迷った。

客が、オルガニクスの風味を理解できるかどうか疑問だったからだ。普通のものの方が、味に馴染みがある。

もちろん、普通の豆も準備すればいいのだけれど、それだと、別のグライNDERが必要になる。

しかも、ディカフェ用のグライNDERも別にしなければならぬ。カフェを始めたばかりの奈々にとって、高価なグライNDERを並べ

て揃える余裕はなかった。

グラインダーの使い方も、その日の気温と湿気で味は微妙に違ってくると言う。

店のドアが開き、外の空気が入ってくるだけでも変化したりするらしい。

奈々も、グラインダーの調整はこまめにする。

奈々の知り合いの一人は、世界でも有名なエスプレッソ珈琲店で働いていたことがあると言っていた。

彼女が働いていた時は、まだその店は店舗も少なく、グラインダーを自分たちで調整していたそうだ。

そして、店舗と従業員が増えると、規格化が必要となり、グラインダーはオートマチックに変えられた。

彼女は、昔の頃が懐かしいと言う。
だから、本当にコーヒーを好きな人は、流行にこだわることなく、自分の好みのカフェを見つけ出す。

とは言え、チェーン店が悪いというのではない。

それはそれ、味と値段に見合い、はずれない味を注文できるという安心感がある。

それでもコーヒーの味は複雑で、いくら規格化しても、やはり違った味になる。

奈々は、同じチェーン店でも、どこがどんな味を出すのかも知っている。

店の雰囲気も違うだろうし、入れる人が違っても味が違う。

そう考えると、結構、楽しめる。

もちろん、出された味が気に入らなければ、にっこりと笑って作り直させる。

たまに、近くにそのチェーン店があるのに、遠くの店に行ったりもする。

「これは、ここで飲まなきゃね」というのもあったりするから面白い。

ところで、こんなにコーヒーにこだわりを持つ奈々だが、実は、コーヒーより紅茶の方が好きなのだ。

奈々は紅茶の店を出したい所だが、紅茶はティーバッグで、というアメリカ人相手に、紅茶の商売するのは難しい。

もちろん、紅茶専門店もないわけではない。

とは言え、それはかなり厳しい道で、新参者の奈々に太刀打ち出来るものではなかった。

紅茶は、好きな人が満足できるほどには供えられているから、奈々は、それで良いのだと思うことにしている。

ラリーは、そんな話を奈々とするのも好きだったかもしれない。

さて、ラリーの話していた美女のことだけど、それだけでは終わらなかった。

近所に住んでいる、同じ学校の男子生徒たちが、これを面白く思わなかったのだ。

彼らは、自分たちも誘ってもらいたいのだけけれど、声がかかることはなく、ラリーに嫉妬していた。

もちろんこの美女だって、作法の分からないティーンエイジャーたちの相手をするほど交際に困っている訳ではない。

それで、残念なことに、嫉妬されたラリーは、苛められてしまったのだ。

その傷は、長い間、ラリーの悲しみとして残ることになる。

とは言え、ラリーにとって、彼女との思い出は素敵なものだった。

彼女が、そうしてくれたことを恨んではない。
奈々は、その話を楽しそうにするラリーを見て、思わず笑みを浮かべる。

そうしてラリーは大人になり、美女も、しばらくしてその家を去って行った。

その後、ラリーにも恋人はいたけれど、結婚することなく独身紳士を貫いたそうだ。

彼は、このまま貫いていこうと思っていた。
奈々に会うまでは。

奈々がラリーに会ったのは、ラリーの店が、奈々の行くヘアサロンの隣にあったからだ。

このヘアサロンは、サロンと言うにふさわしく、ヨーロッパの雰囲気があり、店主も腕のいいヘアスタイリストだった。

彼女は、奈々の髪を扱いながら、ラリーのことをこう言った。

「ラリーはね、とても紳士的な人よ。

彼は、女性を淑女のように扱ってくれるの。

私には夫がいるからだめだけど、ラリーを、せめて執事として、私のそばに置きたいと思ってしまっわ。

ああ、本当に、わたしがお金持ちだったらいいのに」

その時すでに、奈々を見かけていたラリーは、この日本人の女性と知り合いたいと思っていた。

奈々の方と言えば、その高級紳士服店に興味があった。

高級な物は買えないけれど、小物や、季節はずれのセールのものだったら買えるとその店を訪ねる。

そうして奈々は、ラリーと知り合ったのだ。

奈々は、ラリーとは、親子ほど年が離れている。

相手がそんなに年上でも、違和感なく話をする。

自分の知らないことを教えてもらうのも楽しいと思っている。

だから、ファッションの事を知っているラリーとの会話も弾んだ。

奈々は、少年ラリーの心を捉えたモデル美女のように美人ではないけれど、背は高くスタイルもいい。

そして、古着屋で珍しいものを見つけると、それを素敵に着こなし、カフェの雰囲気をつそう引き立てる。

奈々の服のセンスは新しいのに、どこことなく古風な感じもして魅力的だ。

よくお客から、「その服はどこで買ったの？」と聞かれる。

そして彼女は、笑って答える。

「古着屋よ」

奈々が身につけている物も、高価なものであったり、安く買ったもの、とバラエティーがある。

無駄なものにはお金は使わないし、必要なくなったらオークションで売る。

奈々は、物に執着しない。

潔く、素敵な服のセンスのある奈々だから、ラリーも、彼女のことを気に入ったのかもしれない。

そしてラリーは、そんな奈々にプレゼントをする。

ある時は、数百ドルするアンティーク物のカフスボタンをプレゼントした。

奈々は、流石に、それは受け取れないと断ったが、友情の印だと言ってラリーは引き下がらなかった。

ラリーは、奈々に魅せられてしまっている。

他の女性がラリーに近づいた時も、「自分には心に決めた人がいる」と言って断ったそうだ。

奈々は、いつもラリーに言う。

「自分は離婚したばかりで、今は、特定の人と付き合うつもりはない」と。

ラリーは、そんな奈々は、「誰かを必要としている」と言う。

もしかしたら、自分が苛められた時のことを思い出しているのかもしれない。

そんなところは奈々を困らせるのだが、人の思いというものは、他人が止められるものでもない。

しかも、カフェのお客として来るラリーを、無碍にするわけにもいかない。

こうしてラリーは、仕事が休みの日は、必ずカフェ・ツインナナにやってくる。

そして奈々は、優しく微笑むと、ラリーを、大切なお客の一人として迎える。

3話 デュラン

奈々にはメイと言う友人がいる。
年上の既婚者で、奈々のカフェの食器洗いや掃除、買い物などを手
伝ってくれる。

メイは、奈々のカフェのやり方に口出しすることはなく、いつも奈
々を見守るという存在だ。

その日、メイが買い物に出かけようとすると、ドアが開いて一人
の客が入って来た。

大学生の男の子で、メイのためにドアを開けていてくれる。
身なりのさっぱりしたその大学生は、メイと目が合うと、にっこり
笑い軽くうなずくように会釈した。

” T h a n k s . ”

メイは笑顔で言うどドアを通り抜ける。

ドアが閉まると、メイは振り返った。

ガラスのドアに、青い空と緑の木々の景色が写っている。

その景色に混じり、ガラスを通して見える彼の背中がカフェの奥へ
と消えてゆく。

メイは、ふふつと笑って言った。

” A n o t h e r o n e . ” (別の人ね)

カフェのお客は大学の関係者が多い。

学生たちがほとんどだけれど、たまに大学教授もマテ茶を飲みなが
らレポートを読んでいたりする。

同じ大学ではなかったけれど、奈々も留学生だった。
だから彼らとの会話も合う。

奈々は日本で高校の英語科へ通っていた。

ホームステイも、オーストラリアとアメリカでやっている。

そして高校を卒業し、留学のための大学はTOFLEの必要のないコミュニティカレッジを選んだ。

勉強というよりは、アメリカでの生活を楽しみたかったからだ。

この国に住み続けたいとも思っていたけれど、そのために何か特別なことをするという風でもなかった。

それは彼女のあせらない性格のせいで、経済的にも恵まれていたから出来たことだ。

留学生は、それぞれの思いを持って外国で学ぶ。

何のためにここへ来たのかと聞かれたりするから、簡単に答えられるようにしておいた方がいい。

特別な答えを準備する必要はなく、語学留学、または文化を学びたいと言うだけでも立派な答えになる。

とにかく、外国に出てみるのは良いことだ。

ところが、学校と家での宿題に追われ、外国に住む経験をあまり楽しめなかった留学生もいたりする。

中には、日本で学べたことを外国で苦勞して学び、時間とお金を使ってしまった人もいた。

留学という肩書きが欲しかったと言う人もいたりする。

それでも何かを学べたはずだから無駄ではない。

奈々は、この国での生活を楽しむことと英語力をアップすることを目的としていた。

だから日本の友人は作らず、日本人や他の国の留学生がいない授業を選んだ。

コミュニティカレッジだったから、ジュエリーのデザインなんてク

ラスもある。

もちろん難しいクラスもあった。

特に経済学のレベルは高く、実践経験をした人でなければ付いていけないそうだ。

このように奈々は、この大学の幅が広いのも気に入っていた。

また奈々は、初めは車を運転しなかった。

バスに乗り、乗る前に買った新聞や雑誌を、乗客や運転手にプレゼントしたりして話しかける。

英語が聞き取れなかったり意味が分からなければ、可愛いメモ帳を出して書く。

そのメモ帳も話題の一つになる。

奈々は、なんでもメモ帳に書き留めるから、そんなひたむきな態度は好感を持たれた。

そうしてバスの乗客や運転手とも軽くジョークの言える仲になっていったらしい。

奈々は、ホームステイにも恵まれていた。

バス停の近くにある家で、そこからバスに乗ると、直接カレッジへ行けるので、乗り換える必要はない。

それに、その白人の中年夫婦はオルガニックの菜食主義者で、料理の味も良かった。

1年後に彼らが引っ越す時、奈々に、自分たちの引越し先にある大学に移っては、と誘われるほど仲がよくなっていた。

奈々は、それを丁重にお断りしてアパートへ移った。

そんな風に、あせらず楽しく留学生活を楽しんでいた。

とは言え、いいことばかりでもない。

結婚は考えていなかったのに、結婚してしまい、4年後には離婚した。

子供は出来なかったけれど、グリーンカードを得ることは出来た。だから、離婚と言う苦勞の結果からの褒美をもらえたようにも思っている。

さて、カフェ・ツインナナに、毎日のようにやってくる大学生の名前はデュランと言った。

すっきりとしたハンサムな子で、もの静かな好青年というタイプだ。アメリカ人に良くある積極性というか、自分を主張する感じはあまりない。

奈々は、デュランの静かなラブコールを、いつもにこやかに交わす。

ところがデュランにとって、そんなところが、ますます魅力的に思えたらしい。

アメリカ人の女の子は積極的だ。

デュランは、それがいやだった。

そんなある日、突然に、デュランの父親がカフェへやってきた。どうやらデュランが、奈々との交際を真剣に考えていると父親に言ってしまったらしい。

そこで、社会にも出ていない、未熟な我が息子をたぶらかすカフェの女主人とはどんな人かと思ったのだそうだ。

もちろん、奈々にとっては寝耳に水の話である。

誤解はすぐ解けたのだけれど、奈々はこの父親を見て、なるほどと思った。

歯科医師の、ちょっと厳しい感じの人で、それだから息子のデュランは品が良かったのかもしれない。

とにかく、若い男の子が年上の女性に熱を上げるのは、古今東西、

よくある話だ。

それで奈々は、デュランの想いは分かっていたけれど、距離を置くようにしていた。

年下の子に好かれるというのは、子供や動物から好かれるのと同じようなかもしれない。

もちろん、年下とは言え、大学生を動物や子供と似ているというのは語弊があるけれど、可愛い感じはする。

ところで奈々は、動物も子供も苦手なのだ。

子供の頃、可愛い子犬でさえ怖くて逃げ出していた。

それなのに、メイの家にいる犬たちは奈々が好きで、その一匹の小型犬は、奈々を自分のご主人様であるかのように慕う。

このふたりの関係は、人間と犬と言うより、女の子とお人形さんと言う不思議な関係だ。

苦手なはずの子供に関しても面白い逸話がある。

それは奈々が、図書館でボランティアをしていた時のことだ。

奈々は、本が返却されるカウンターで本を受け取っていた。

そしていつも、奈々の所にだけ子供の長い列が出来るのだ。

奈々は子供たちに、その本について軽く会話をし、一人の人として接する。

子供であっても、大人であっても、一個の人間として扱われるのは気持ちがいいものだ。

奈々は、ティーンエイジャーの子たちとは気が合う。

あまり経済的に余裕のない家庭の娘たちを誘っては古着屋めぐりをする。

そして、安くて良いものを見つけるように助けてあげて、その後は、カップケーキ専門店でおやつにする。

そこは夢のようなカップケーキがいっぱいある可愛い店で、値段もあまり高くない。

そんな風に、お金を掛けない遊び方をする。

奈々は結婚していた時に、アンティークに興味を持つようになった。

カフェ・ツインナナのインテリアは、奈々がアンティークショップで買い求めたものやビンテージのものが多く、

だから古着屋めぐりもお手のものだし、ブランド物、時には値札が付いたものまで安く買ったりする。

そうしたものを、インターネット・オークションで売買もする。それでカフェにお客がなく暇な時は、コンピューターに向かっていることが多い。

最近は、そちらの方が本業になりつつある。

この小さなカフェは、ある意味、奈々のオフィスのようでもある。

デュランは、奈々がコンピューターに向かっていているような、お客が少ない時を見計らってくる。

そして、いつも一人でやってくる。

奈々と話をしたいからだ。

奈々はデュランの話を引き出し、良く聞いてあげる。

そんな所が、彼の気持ちを捕らえたのかもしれない。

気持ちを捕らえると言えば、奈々が留学生だった頃、メイを驚かせたことがあった。

突然に、友達だと言って、黒人青年をメイに紹介した時のことだ。彼は、奈々より少し年上で、カリフォルニアから仕事のためにやってきて数週間滞在していると言う。

ところがこの青年は、メイに「奈々と結婚したい」と突然に言った

のだ。

それは3人で、ショッピングモールの素敵なカフェの丸いテーブルを囲んでいた時のことだった。

彼はとても礼儀正しく、まるで奈々の家族に尋ねるかのようにメイに伺いを立てる。

そして自分は、しっかりとした家庭で育ったと言う。

メイは、アメリカ南部を訪問した時、たくさんの驍の行き届いた黒人の若者たちに会っている。

その礼儀正しさは、日本人の若者を恥ずかしく思わせるくらいに魅力的で関心させられた。

とにかく奈々は、その青年との会話の横で、紅茶を飲みながら何か他の事を考えているようだった。

メイは、奈々をパウダールームへ誘う。

そして言った。

「彼は、あなたと結婚したいんですって」

「えーっ？」

と奈々が驚く。

「聞いてなかったの？」

「いや、他の事を考えていて・・・」

「それで、あなたはどうかなの？」

「彼はお友達よ。それに私、結婚なんて考えたこともないわ」

「でしようね・・・」

とメイは、ため息をつく。

メイは思った。

確かに、この国にいたい奈々にとって、結婚はグリーンカードを得るひとつの方法なのだ。

それでも奈々は、そんなことのために結婚するとも思えない。

結局奈々は、この青年の猛烈なアタックをのりくらりと交わし、そうして彼はカリフォルニアへ帰っていった。

デュランが、この青年と同じように思い、自分の父親に「奈々と結婚したい」と言ったのかは定かでない。

そして奈々が、「異性と付き合うことを考えていない」と言っても、諦めるつもりはないらしい。

今日もデュランはカフェにやって来る。

奈々は、そんなデュランを、午後のひだまりでまどろむ猫のように、のりくらりと交わしていた。

4話 傷ついた心

カフェ・ツインナナに、ビリー・ホリデイの曲が流れていた。

このけだるく、そして情感豊かな歌い方は、人を魅了する。

彼女の不幸は、幼い頃から始まり、心を壊し、彼女の歌に染み込む。そうして、不世出のジャズシンガーと言われた歌手、ビリー・ホリデイ。

彼女の歌声は、傷ついた人の心を、甘く優しく包み込む。

メイがカフェへやって来ると、奈々は憔悴した様子でメイを見る。「どうしたの？」

メイが言うつと、奈々は深くため息を付いて、それに答えた。

「さっきまで、アレックス、ラリー、デュランの3人がここにいたの」

メイは驚くが、ありえないことではなかった。

むしろ今まで、それがなかったのが不思議なくらいだ。

「で、どうしたの？」

「一応、お客様として接して、無事に終わったわ」

「これからも、そんなことがあるんじゃないかしら」

「そうね、どうしようもないけれど」

この奈々の「どうしようもない」と言うのは当たっている。

もちろんカフェの客だということもあるけれど、彼らの、奈々に執着する気持ちはどうしようもないのだ。

それは、奈々の結婚と離婚がそうだった。

奈々の結婚は、初めから間違っていた。
その時、奈々はまだ大学生で、騙されたと言った方がよかったのかもしれない。
相手は、背が高く、明るい髪の色をした人で、奈々の親と同じくらい年上だった。

メイは、この男性のことを奈々に警告していたのだけれど、彼の奈々に対する執着心は予想を超えていた。
彼は、付き合うことすら反対されるのは分かっていたから、先に、奈々と結婚しようと画策する。
そうしてメイが気が付いた時、この二人はすでに結婚していた。
メイは、仕方がないので、彼らを祝福することにし、その結婚が幸せなものであるようにと願う。

ところが彼は、奈々が逃げるのを恐れ、すべてを管理し、自分と一緒にでなければ奈々を外にも出さない。
それは病的だと言いがなかった。
奈々は、あまり自分のことを言わないところがある。
それでメイは変だなと思いつつも、いつも一緒にいるこの二人は、仲がいいのかもしれないと思っていた。

彼はコンピューターに精通していて、奈々にコンピューターの使い方を教える。
彼が働いている昼間、奈々は家で一人、コンピューターを相手に生活する日々を送った。
アンティークのインターネット売買を始めたのもその時だ。

とは言え、奈々は拘束されていても、心は自由だった。
彼は、奈々の心も縛りたかったけれど、それが出来ない。

そして、ついに言った。

「一緒に死のう」

奈々は答える。

「死ぬなら一人で死んで」

奈々は、自分は殺されるかもしれないと思った。

そしてメイも、何となくそれを感じていた。

とは言え、奈々が黙っている以上、何も出来ない。

まさか「殺されそうなの？」なんて聞けないし、考え過ぎかもしれないと思ったりする。

とにかくメイは、気付いていない振りをした。

奈々を遠くへ連れ去られては困るのだ。

二人は離婚の前に、すでに家庭内別居をしていて寝室も別だった。

そしてある夜、奈々が寝ていると、彼が寝室へ入ってくる。

奈々は目が覚めていたけれど、寝ている振りをした。

彼は、ブラケットをめくり、奈々の背中を撫でる。

そして泣きながら繰り返す。

” I · m s o r r y · I · m s o r r y : ”

そうして、彼の方がその生活に耐えられなくなり、自分から奈々を離婚した。

驚いたことに、離婚しても、彼は、奈々とメイを騙し続ける事が出来ると思っていたらしい。

そして奈々を、ガールフレンドとしてキープしようとする。

メイは、はつきりと彼に言った。

「あなたは、私たちとは、もう関係がないのよ」

その時、彼は、自分の方が追い払われたことに気が付いた。二人の会話を聞いていた奈々は、心の中で拍手したと言う。奈々にとって、彼は過去の人となった。

「奈々は、もう結婚しないの？」

メイが聞く。

「今は無理ね。」

あの人たちは・・・」

と言って、奈々は、メイの後ろにある窓の外に目をやる。

「私を愛しているのではなく、私の心の傷に引かれているのよ」

「そうなの？」

「だって、あの人たちにも心の傷があつて、それがお互いを求め合っているんですもの。」

もしかしたら、私の方が引き寄せているのかもしれないわね。

それなのに、私には、あの人たちの傷を覆えない。

あの人たちも、私を覆えない。

だから死のうとする」

メイは、ふつと笑うと言った。

「じゃあ、あなたに結婚は無理ね。」

だってすべての人は、心に傷を負っているんですもの」

奈々はメイを見る。

そして笑うと言った。

「そうね」

「このカフェも閉じなければならぬかもしれないわ」

「そう？」

「変な電話がかかってくるの」

「彼から？」

「おそらく・・・」

それは、さほど驚くこともなかった。

奈々は離婚しても、しばらくの間、彼にストーキングされていたからだ。

夜遅く、家の近くで待ち伏せされたり、プレゼントがドアの所に置かれていたりした。

メイは奈々にそれを日記に書き記し、裁判所へ訴えることを勧めた。

そして彼は、裁判所で裁判官から釘を刺されている。

奈々は、「なぜ今になって、また電話をかけてくるのだろう」と思う。

何かあるのかもしれない。

その電話は、カフェの電話と携帯電話にかかってきて、奈々が出ると切れる。

電話の主は何も言わない。

彼は、カフェの近くのアパートに住んでいる女性の電話を使って、奈々に電話をかけているらしかった。

奈々はその女性に電話をかけてみたけれど、知らない人で、彼女も身に覚えがないと言う。

彼女は彼のガールフレンドなのかもしれない。

彼は、女なしでは生きていけない人だった。

彼の手口はしつこくて巧妙だから、彼がかけているのか、その女性なのかは分からない。

個人の家だったら、彼なのかは駐車した車で確かめられるのだけれど、アパートだと簡単には分からない。

だから彼自身も、まるでマンションのようなアパートに住んでいるとにかく、彼はもう裁判所に行く気はないから、その備えはしているはずだ。

どちらにしても、彼は、奈々に近付こうと思えば、いつでも出来る。

彼にとって、奈々は過去の人ではないのだろう。

執着している心は、その人が望まない限り、他の人には止められない。

奈々は、彼を恐れていなかった。

自分に出来ることはすべてやったし、後は、正しい判断と、毅然とした態度で対処するだけだ。

それでも殺されるなら、それは仕方がないとも思っている。

結婚したのは自分だから、自分にも責任があるのだ。

そのようにして、これからも生きていかなければならない。

ただ、カフェの客には迷惑をかけられない。

もちろん、彼が馬鹿なことをするとも思えないけれど、精神が病んでいれば分からない。

殺されるか殺されないかと言う問題になると、アレックスがどう思うかも気になっていた。

客の一人の男性が言っていたことがある。

彼が、元グリーンベレー、ゲリラ戦のための特殊部隊だった友人の肩を、後ろからポンと叩いた時のことだ。

とつさにその友人は、別人となって振り返る。
そして彼を見て、ため息を付くと、こう言った。

「二度とそれはしないでくれ、自分は相手を殺すように訓練されている。

一瞬で、君を殺すことも出来るんだ」

カフェ・ツインナナは、奈々を癒してくれる空間だった。

自分の好きなインテリア、窓からの景色、かえでの並木道、レンガ作りの大学の校舎、

そして、いつも聞いているミュージック。

ビリー・ホリデイの曲、The Very Thought
of you が、カフェに流れる。

それは、

あなたを想って何も出来なくて、夢でも見ているよう

あなたのそばに身を寄せるまでの時がゆっくり過ぎて・・・
と歌っている。

奈々は、カフェを閉じる準備を始めた。

そして次へ進もうと思う。

かえでの木の葉が落ちてしまった遅い秋、アレックスがいつものようにカフェへやって来た。

「アレックス、昨日、高速道路であなたのモーターバイクが、警官に止められていたんじゃない？」

奈々が言うと、アレックスは苦笑いする。

「ああ、友人にバイクを貸したら、スピード違反で捕まったらしいんだ」

「そうだったの、あなたのバイクだとは思ってたけれど、乗っていたのはあなたじゃなかったから」

「俺のバイクを覚えていてくれたんだ」

「あのバイクは、この世でたった一台じゃない」

「そうだね」

とアレックスは言って、カウンターに身を乗り出す。

「ねえ奈々、君は本当に結婚する気はないの？」

アレックスのコーヒーを準備していた奈々は、振り返るとそれに答える。

「いつかはするわよ」

「それっていつなの？」

「そうね・・・二、三百年くらい先かしら」

アレックスは笑いながら、ちょっと間をおくと言った。

「そうだね、それもいいかもしれないね」

奈々もアレックスに微笑み返す。

その時も、ビリー・ホリデイの曲が流れていた。

そして、カフェ・ツインナナが閉じる日まで、こんな会話が続いていく。

FIN

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8193p/>

カフェ・ツインナナ

2011年1月28日13時55分発行